

江戸期五位史(三)

——指月慧印の場合——

新井 勝龍

はじめに

日本曹洞宗学が、江戸中期面山瑞方(一六八三—一七六九)により、その書誌・歴史・思想の学問の全分野において、研究が大成されたというのは定説となっている。

といってもそれが完成されたという意味ではない。本証妙修思想・座禪・禪戒・清規・嗣法等、開祖道元禪師(一一〇〇—一二五三)の親撰が有るものについては、大凡の復古がみられるが、それでも詳細な理解面に問題があることは、種々指摘されている通りである。

まして道元禪師の親述がなく、委曲を尽くした権威書も少ない五位思想については、この傾向は著しい。即ち面山には偏正五位について、所謂曹洞の論理的正統五位といわれるものの祖述もあるが、一方真言の五仏・五智を当てはめ、更にその全体を段階修証的に見ている点のあるのは、教学を批判

し本証妙修を唱える道元禪師の宗旨とは、異なるものといえよう。

但しこれは面山に限らず、大凡の宗学者が道元禪師の思想としては、本証妙修を唱えているにも拘わらず、本証面の偏正五位の註釈にすら、段階修証的偏向を示してくるのであり、それは月舟宗胡(一六一八—一六九六)連山交易(一六三五—一六九四)己山道白(一六三六—一七一五)天桂伝尊(一六四八—一七三五)も同様である。五位説大成とされる洞水月湛(一七二八—一八〇三)も功勲五位の解釈では、後述の如く証上之修を強調しながら、實際は段階修を容認しているのを見れば、思い半ばに過ぎよう。

この理由は、本来修証隔別の性格のある中国曹洞禪の機関に、日本曹洞禪の本証妙修思想を盛るといふ、異質的なものを同質に扱うことの困難さに基づくと思われるが、これらの諸師に対し、指月慧印(一六八九—一七六四)は結論からい

ば、所謂の道元禪師の宗旨についての理解を、そのまま五位理解に果たした希有の人のようである。以下このことについて述べたい。

一、指月の五位思想

1、宗派否定

指月の五位思想の独自性の第一は、岡田宜法師が指月を、「宇宙論的な態度」でみることににおいて、洞山の見解を始めて明確に道破したと讃えているところに知られる。

勿論これは偏正五位についてであるが、江戸期最初の正統五位の復古者とみられる天桂伝尊は「学人弁驗具」、五位の大成者とされる洞水月湛は「師家作用上設」とする差はあるが、五位は洞山が対機的に権に開いたものであり、他家に知られぬ曹洞宗旨を表わす機関とみている。

これに対し指月は「五位之作至矣^{セリ}尽矣^ス。言象不^ル多^カ。以^テ總^ベ諸法之本末^ヲ。究^ム三生仏迷悟事理之蘊奥^ヲ……初後内外含攝無^レ極^ヲ。」と宇宙の真理・仏法の根本道理を総括したものであり、従って「嗚呼世有不^レ状^ノ徒^ニ。以^テ為^ス五位非^ニ洞下人^ノ則不^レ曉也^ヲ。噫果^{シテ}如^キ所^レ言者^ヲ。止^ム終私暱^ニ己^ヲ。豈足^ニ為^ス弘法度物之道^ヲ乎^ヲ……凡言^ハ宗家^ノ者道之賊^{ナリ}。」とあくまでも、曹洞宗の私物ではないことを強調している。

一般に偏正五位が易卦に譬えられることから、宇宙の真

理であることを主張する者は多いが、宗派性をこれ程徹底的に否定して述べたものはいない。これは道元禪師が禪宗という呼称すら否定し、正法のみを強調されたのと、同じ姿勢であるということができよう。

所で五位をこのように、道元禪師の立場で理解しようとする、ここに大問題が生ずる。即ち五位には、証の面を分位した偏正五位に対し、修の面を分位した功勲五位があるが、この功勲五位が本来段階的性格のために、道元禪師の本証妙修思想では甚だ捉え難いものであるからである。指月はこれを如何に解釈しているかを、次にみよう。

2、功勲五位の本証妙修的理解

功勲五位は洞山より三代目の法孫石門慧徹が『禪林僧宝伝』で、「譬^ハ如^キ初生鳩兒毛羽可憐生^ル久々^ニ自能^ニ高飛遠蕩^ス」と、その段階的性格を紹介し、これが一般に流布されているように、確かにその洞山頌や洞山の問答からしても、修行の階梯と解されるものである。

この段階性は中国禪の性格として、葉山惟儼(七四五—八二八)が始め石頭希遷(七〇〇—七九〇)に参じて機縁叶わず、かくして石頭の指示により馬祖に参ぜしめられた。そして馬祖に許されて後、再び石頭に還つてそこで契い、始めて石頭に嗣法したのであるが、このように明らかに家風の異なる所に遍参して嗣法に至るのが、当然とされていたことから納

得できるのである。

けれ共これは、一師遍参を旨とする道元禪師の面接の仏法からは、認められるべきものではあるまい。しかし、これについて五位説の全面的大成者とされる洞水は「宗祖道元禪師の証上之修において一超直入如来地であるが、一超直入如来地の力なき（不器）なるものにとつては、楷漸説の功勲五位こそ、第一の甘露となる」とし、「前三位は尊貴独立底人の自覚の過程、第四位は自在、第五位は異類中行」と、明らかに段階性を認めているのは、むしろ本来の思想の忠実な理解といえる。

これに対し指月は、一応は石門の段階説の語を引用しつつ「祖師意不_レ局_ニ干_一是_一。一々有_レ投_ニ契_一上祖之真宗_ニ而出_ニ作_レ功_一途_ニ」¹⁰といひ「立_ニ乎_一功_ニ修_ニ乎_一功_ニ成_ニ乎_一功_ニ整_ニ乎_一功_ニ歸_ニ功_一。常入_ニ向_ニ奉_ニ等_ニ究竟_ニ無_レ成_ニ無_レ不_レ成_ニ」¹¹と、究極の功功が一位にある、一位一切位が真宗であるという。

又「可_レ知_ニ功勲_ニ有_ニ五_ニ次_ニ第_ニ三_ニ而_レ但_ニ向_ニ一位_ニ外_ニ無_ニ他_ニ可_レ見_一。初知_ニ向_ニ之時_ニ一切_ニ尽_ニ無_レ不_レ向_ニ」¹²如_レ向_ニ奉_ニ尔_ニ如_レ奉_ニ余_ニ位_ニ亦_ニ尔_ニ故_ニ初心_ニ全_ニ極_ニ処_ニ極_ニ処_ニ円_ニ初_ニ心_ニ」¹³と、一位々々道元禪師の一方究尽による本証妙修の道理で捉えきって示している。

3、論理性強調

次に偏正五位の内容理解については、曹山の全体を「明_ニ從_ニ上_ニ物_ニ体_ニ現_ニ前_ニ」¹⁴とする説明や、正位は平等の理・偏位は差

別の事とする解釈を重んじ、これにより従来試みられたことのなかった華嚴教学の四法界觀門の円融相即の論理をかりて、回互不回互兼帯を説明している。

これは所謂の、段階性を否定し論理性を尊ぶ道元禪師の宗旨に沿うものといえよう。

以上の三点からみて指月説は、所謂の道元禪師の宗旨において、五位理解を徹底せしめたものとして、江戸期は勿論のこと五位思想史全体の中においても、空前絶後というべきものである。

二、指月五位説の再検討

ここで右の在来の見方においてなされ得た評価を熟看するに、私は前二点は道元禪師の趣旨として妥当と思うが、第三点は問題であると考ええる。それは論理的なのが道元禪師の真意であるとの前提によるのであるが、私は嘗て日本仏教学会で発表した如く、道元禪は所謂の論理性強調のみではないとみるからである。

洞山・道元禪師の宗旨の底流を流れるものは一つで、それは「五位顯訣並疎」に示されている如くであり、例えば正位却偏を曹山が不顧者で示しているところに知られる。

不顧者とは、曹山と一僧との「子就父」の問答を示し、正位の父は偏位の子が奉重してきても、全く顧りみもしない。

しかしそこにこそ真実の親しさが知られ、その一体・兼帯なることが現れるというのである。

即ち正と偏の異物を、単にこれがあれと理解における論理的円融で説くのではなく、主体的に正が一方究尽において、無對待脱落の没蹤跡の故に含摂せずということなく、かくして偏の子を残すところなく一体として包みこんでいる、というのであり、この根本道理は他の四位も同様で、この道理こそ道元禪師の宗旨の根本をなすものと思われる。

五位とはこのように、禪者自身が正位或いは偏位等の置かれた状況になりきり、一挙手一投足一対応のところに仏法を尽くすのを主眼として、その根本的にして典型的なあり方を回互・不回互・兼帯の三点から開いて五門にしたものに外ならない。所謂の論理性などではないのである。

然るに「五位顯訣並揀」ではこのように禪的機解釈を示した曹山が、一般の理解に便ならしめようとしてか『君臣五位旨訣』では偏正に事理・君臣を当てはめて円融して説いたのが、後世の教学的解釈の発端となった如くで、指月も日用動用に五位ありと説くもそれ以上ではなく、そして法界観門を援用し円融を強調しているのは、正にこの教学性に偏したものとええよう。しかし明治以後の眼藏家達も、殆んどこのような解釈をなしているのを見ると、これこそ曹洞的理解とされてきた伝統を感じずにはおれない。

おわりに

以上、江戸中期の指月慧印の五位思想は、所謂の道元禪による理解を完成せしめたものとして、実にすぐれた点があると同時に、一方曹洞禪を論理的とみ、華嚴学と混同する問題点のあることを指摘した。

この傾向は五位説大成者とされる洞水も免かれていず、特に実践性の稀薄な近代では更に著しくなっている。

しかしこの点を明らかにしてゆかねば、学行一如の曹洞禪は華嚴の観門の中にその存在意義を失なう危険性があることを忘れてはなるまい。

2 1 『続曹全』語録二「洞上五位正偏普説」参照。

2 月舟・連山・正山については『宗学研究』第二十六・七号拙論「江戸期五位史」、天桂については、同第九号拙論「初期江戸宗学の一考察」参照。

3 『日本禅籍史論』623頁。

4 『曹全』注解三・590頁。

5 同右注解560頁。

6 同右463頁。

7 同右頁。

8 洞山が雪峰を徳山に参ぜしめたも、機根による段階性の容認によると思われる。

9 『曹全』注解五「功勲五位説傍提」548頁555頁。

10 同右「不能語五位説」469頁。

11 同右472頁。

12 同右「未正語」461・462頁。

13 同右「洞山悟本大師五位小説」479頁。

14 同右「重編曹洞五位」5頁。

15 『大正藏』47卷「曹山録」538頁c。

16 同右536頁c・537頁a。

17 西有穆山『五位説不能語講話』秋野孝道『禅要五位説講話』(駒沢大学教授)